

対人支援点描 (18)

「宗教者の召命とフランクル, V. E. の思想」

小林 茂 (臨床心理士/牧師)

はじめに.

筆者はキリスト教教会の牧師でもある。その牧師を目指すきっかけにはいろいろ理由もあるし、自分なりに信じるところもあるが、キリスト教の考えに接するなかで知った言葉に「召命」という言葉がある。この「召命」という言葉の意味、とらえ方と、精神科医で心理学者であるフランクル, V. E. が説く「人生の意味」についての考え方には共通するところがあり、今回、改めて書き残しておこうと考えた。

1. 「召命」という言葉の意味

「召命」という感じの文字だけを追うと、「命が召される」ということで死去のことをイメージするかもしれない。しかし、「召命」という感じが充てられた元の言葉は **vocation** である。その意味するところは「声をかける」「呼び出す」ということになる。また、特に宗教用語(キリスト教)の用語の意味として、「神から神のために働くよう声をかけられる」という意味を持つ。違った表現でいえば、「召し出

される」という表現がされることもある。したがって、私のような牧師（もしくは神父、宣教師など）もまた、何かしらの神からの声かけをもらい、その道を歩み始めたということが出来る。もちろん、神から声をかけられるという意味は、音声を伴うコミュニケーションが神との間で起こったということではない。信仰で示される価値観との間で、自分のできることは何かと自分の負うべき務めとして牧師となる道を選んだというようなことである。こうしたことを神からの「召命(vocation)」という表現で受け止めた、といえる。

また、「召命(vocation)」という言葉が、こうした宗教的な意味の背景を持つことから、「召命(vocation)」は「職業」という意味を持つことになる。それも特に「(神から与えられた) 職業」という意味で「天職」という広義の意味としても理解されるようになった。

その人にあった最適な仕事、その人が満足を得る仕事を示すものとして「(神から与えられた) 職業」としての「天職」と解されたといえる。

そして、「召命」に応じて働くことを、特に「任務・使命(mission)」という結びつきをもつものと解された。

つまり、「召命(vocation)」と「任務・使命(mission)」とは対概念であり、その「任務・使命(mission)」に努める姿に「天職」を観るわけである。

2. フランクル, V. E. の人生の意味への問い

フランクル, V. E. (Viktor Emil

Frankl, 1905 年 3 月 26 日 ~1997 年 9 月 2 日) は、「ロゴセラピー」を開発し、人生の意味について問うた有名なオーストリアの精神科医、心理学者である。改めて、紹介するまでもない。フランクル, V. E. のナチス強制収容所での実体験を元に著した本『夜と霧』は、日本語を含め 17 カ国語以上に翻訳され、60 年以上にわたって読み継がれている。

その著書の中で、フランクル, V. E. は「...「私はもはや人生から期待すべき何ものをも持っていないのだ。」これに対して人は如何に答えるべきだろうか。...」という生きることへのニヒリズムに対する問いかけを發している。

私たちが絶望するとき、「生きていてもしかたない」という生きることへの意味を問うことがある。言葉を換えれば、「自分の人生に意味があるのか」という問いかけともいえる。

こうした問いかけに対し、認知行動療法的に白黒思考や、問題意識が自己注視から離れられなくなっている点が指摘できるかもしれない。

けれども、思考の傾向や特性の問題があったとしても、人が自分が生きること

や人生や自己存在の意義を問う、という者であるということは否定できない。

このような意味で、フランクル, V. E. が扱った話題は哲学の話ではない。しっかりと精神医学や臨床心理学で扱う問題の範囲にあるものとして指摘できる。

こうした人生の意味を問う問題に対し、フランクル, V. E. は、「...われわれが人生の意味を問うのではなくて、われわれ自身が問われた者として体験されるのである。...人生というのは結局、人生の意味の問題に正しく答えること、人生が各人に課する使命を果たすこと、日々の務めを行うことに対する責任を担うことに他ならない...。」という。

つまり、フランクル, V. E. が述べることを筆者なりに表現すれば、私たちが自らが歩んだ結果や足跡 (= 人生) に意味を求めのではなく、「今、ここ」にある自分が何をすべきか応えようとすることに人生の意味があるのだ、といえるのではないか。

また、フランクル, V. E. は、「人生の生活の意味は決して一般的に述べられないし、この意味についての問いは一般的に答えられない...ここで意味される人生は決して漠然としたものではなく、常にある具体的なものである。」と述べている。人生の意味の在り処は、その人その人の置かれた状況のさなかにある具体的なものとして示されている、というのである。

おわりに～現代の職業観が失ったもの

こうしてみると、宗教的概念である「召命」とフランクル, V. E. が指摘する「人生からわれわれ自身が問われてい

る」という発想は、きわめて近いものがある。これは、宗教でいうところの神仏を人生と読み替えればわかるかもしれない。

つまるところ、私たちは自分の生きている状況の文脈の中で、自分が何をするか常に問いかけを生きているといえる。その問いかけに応えようと奮闘するとき、その時に人生に意味が見いだされ、その務めが自らの天職となると言えるのではないか。

すべての職業に天職や使命を見出そうとする必要はないかもしれないが、自らの取り組みが金銭になるか、社会的成功につながるか、優良企業か、将来的に安定か、こういった物差しばかりではなく、自らの価値観に基づき、それを自分の天職として生きるような職業観や労働観が見失われていると思う。

「召命」の思想やフランクフルト、V.E.が扱った話題をもって、もう一度、人生の意味、職業、労働といったものを考えなおす必要を思う。